

やまと 民俗への招待

鹿谷 熱

2月11日、JR法隆寺駅を降りて、まっすぐ南下する。広々とした川幅で西に流れる大和川を御幸大橋で渡り、西名阪自動車道も越えて、東に小道を入ると、静かなたなづまいの河合町川合の集落になる。さらに東へ進むと、南北に長い廣瀬神社の森が現れる。拝殿前の広庭には、新しい砂が敷かれ、氏子の人たちが立ち話をしている。

廣瀬神社は、奈良盆地のいくつもの川が集まる扇の要のような場所にある。崇神天皇の時代に鎮座したと伝わり、天武天皇4年(675)に「廣瀬河曲に大忌神を祀る」と『日本書紀』にある。宇喜式には神名が「和加乃命」とある。若々しい穀物の女神で、五穀が豊かに実るように川辺で祈るのが「大忌祭」

で、龍田大社の風神祭とともに、早くから重要視されてきた。

この日は「砂かけ祭り」(河合町指定無形民俗文化財)と呼ばれる田植え行事の日だが、長引くコロナ感染症の流行で、行事の前半の「殿上の儀」のみ行われた。午前10時半から祭典が行われ、11時ごろから巫女が神樂を

舞い、拝殿を田に見立てて、田植え行事が始まる。淨衣に烏帽子姿の田植え者が鋤を手にして、トンと軽く床を突いて、アゼ泥を搔き上げるアゼコネを切りながら左に一周して苗代作りの所作をする。次に鍼を持ちかえて泥を搔き上げるアゼコネをして一周。さらに五六十枚の竹で半田状に床を均して苗代を作る所作

このあと鍼を担いで苗代を見回る。田人役は「ガソリンも値上げで、どこへもいかれへんけど、ええ苗できた。今年も頑張っていきましょう!」と

控える。ここで木造の牛馬をかぶった牛役が登場し、まずカラスキ、次にマンガを付けて拝殿を回り、田ごしらえをする。「シ、チャイチャイ」と牛を追う。これで田植え準備が整い、松苗を手にした早乙女が「この苗はわがにはあらず、廣瀬なる神のよさせし、早苗なり」と神楽歌を歌い、苗に見立てた松葉を床に並べていく。



「砂かけ祭り」で糲蒔きをする田人
=河合町の廣瀬神社で筆者撮影

砂なしの砂かけ祭り

即興で語る。

次に「東で八百、西で八百、早乙女衆」と早乙女を呼び出す。早乙女は神前から松葉を束ねて苗に見立てたものを取って舞い、拝殿を田に見立てて、糲蒔きに移る。糲の入った升を小脇に抱えて、田植え行事が始まる。周囲に砂を掛け、集まつた子供たちも田人などに盛んに砂を掛ける砂かけの大騒動が2度ずつ合計8回繰り返されるはずだった。田人や牛役は地元の城古と市場の消防団員が1年交代で担当する。

砂合戦が終わると、早乙女の田植え後に、松苗と薄切りの餅に「田」の印を押した田餅がまかれ込んだ。田人や牛役は地元の城古と市場の消防団員が1年交代で担当する。

世紀初めまで、「御田植」「水口祭」「水府舞」を行っていたといふ。現行の殿上と庭上の2回の実施は昭和7年(1932)からで、もとは広庭の行事だけだったようだ。今

の農耕模倣の所作は、田植え行事の核だと改めて感じることができた。(奈良民俗文化研究所代表)